

2016 年 11 月 12 日 (土)

富山県民会館 611 号室

14:00~15:30

「弥生時代後半期の日本海沿岸地域—地域社会と交流の視点から—」

富山大学人文学部教授

次山 淳 氏

1. 弥生時代の枠組み

弥生時代は、1 万年以上続いた縄文時代の後に続く時代で、弥生時代の後には古墳時代が続く。弥生時代という名称は、東京・弥生町で出土した土器が、その発見以前に貝塚などから出土していた縄文土器や、古墳から出土していた土師器・須恵器と異なることから、



「弥生式土器」と名付けられたのが由来である。弥生土器は、初めから縄文時代と古墳時代の間の時代の土器と考えられていたわけではない。弥生土器は縄文土器より新しく、土師器や須恵器より古いことが次第に明らかにされていき、時代的な流れが捉えられた。その結果、縄文土器を用いた時代が「縄文時代」、弥生土器を用いた時代が「弥生時代」、土師器や須恵器を用いた時代が「古墳時代」(以降)と区分されるようになった。

その過程で、弥生時代のさまざまな文化の様子も明らかになっていった。一つは、農耕が行われていたことである。炭化した米が弥生土器と一緒に出土し、さらに弥生土器の底に稲粃の跡が付いたものが発見されたことで、弥生土器を作っているときに稲粃が存在した確かな証拠となった。また、縄文時代には存在しなかった木製農具(鍬、鋤、杵など)が使われていたことで、弥生時代には原始的な農耕が始まっていたと認識されるようになっていく。

弥生時代にどのような道具が使われていたのかもわかってきた。まず、稲穂を摘み取るときに使う石包丁のような、弥生時代特有の石器が使われていた。さらに、青銅製の武器や鏡、鉄製の道具も使われていた。弥生時代は金属を使い始め、石器とともに金属を用いていた時代として、日本列島の歴史のうえで非常に重要な意味を持つ。

そして、弥生時代の遺跡から出土した鏡は、前漢～後漢時代の中国から渡ってきたものであることが指摘され、弥生時代の年代観が確立した。このようにして弥生時代の実態が、大正から昭和の初めにかけて次々と明らかになっていった。

しかし、昭和 50 年代に入ると多くの資料が蓄積され、縄文土器から弥生土器、そして土師器へという流れが非常に連続的でつながりの強いものであることが明らかになり、土器による時代区分が難しくなった。そこで、土器によるのではなく、縄文時代を狩猟や採集などで日常の糧を得ていた時代、弥生時代を水田稲作が始まった時代と捉えることが提唱された。どのようにして食を得ていたのかという生業活動に着目し、縄文時代と弥生時代を区分する考え方が提示されたのである。こうした考えに基づいて、現在では多くの人が、川から水を引いて水田をつくり、稲作を行ったことをもって弥生時代と定義している。

現在のところ、最古の水田は福岡空港のすぐそばにある福岡市板付遺跡や佐賀県唐津の

菜畑遺跡などで発見されたものとされている。稲作は朝鮮半島から伝わったと考えられているが、環日本海という視点から見ると、弥生時代はその最も西の端で始まった。

一方、弥生時代の終わりは、巨大な前方後円墳が造営されるようになるまでと考えられている。逆に言えば、前方後円墳が造られて以降が古墳時代である。それぞれの時代が何によって最も特徴づけられるのかということによって時代の変化を捉えている。現在では、奈良県の箸墓古墳が最古の前方後円墳であると考えられている。全長約 280m で、最大でも 80m 前後だった弥生時代の墓と比べると、3 倍以上の大きさである。その非常に大きな飛躍をもって弥生時代と古墳時代を区別している。

弥生時代という時代区分だけでは細かい時代の流れを捉えることができないので、土器の変化をものさしにしながら、それに当時の文化的な特徴を重ね合わせることで、弥生時代をさらに早期、前期、中期、後期の四つ、(後期の中から終末期を区別すると五つ)に分けている。早期は九州北部で灌漑式の水田が始まった時期、前期は九州で始まった稲作が日本列島の広い範囲に広がっていく時期、中期は共通性の高いかたちで日本列島に広がった弥生文化が各地で独自性を持ちながら発展していった時期、後期は道具の中心が石器から鉄器に大きく移行する時期とされている。

また、弥生文化の大きな特徴である水田稲作の広がりには、必ずしも日本列島の全域にわたるものではない。水田稲作が定着したのは本州・四国・九州で、北海道や南西諸島などは稲作を受容せず狩猟・漁撈・採集を中心とする生活が続いていた。同じ時期に、稲作を受容した本州など中の地域の文化、北海道を中心とした北の地域の文化、南西諸島の南の地域の文化と、日本列島が三つの文化圏に分かれたことも弥生時代の大きな特色である。

一方で、それぞれの地域は常に密接な関係を持っていた。そのことを端的に表すのが、南海でしか採れないイモガイという巻貝である。輪切りにして腕輪に加工した貝輪が九州北部や西日本の遺跡で発見されているが、同様のものが北海道の伊達市にある有珠モシリ遺跡からも出土している。南の地域と中の地域が九州を介して結び付き、さらに、直接か間接かは明らかではないものの、少なくとも南の地域のもものが日本海ルートを通して北の地域まで到達していたことは間違いない。私たちは、南の文化、中の文化、北の文化がさまざまなかたちで結びつくことによって、大きな交流の流れを形づくっていたことを知ることができる。

2. 弥生時代の暦年代（弥生時代とはいつ頃なのか）

考古学的な研究方法である遺跡の発掘や土器・石器の研究などを通じてわかるのは、基本的に新旧の関係や順序など相対的な年代に限られる。それはいつ頃のことなのか、今から何年前のことなのかという実年代（暦年代）を知るには、考古学に加えて自然科学的な方法や、年代がわかっている別の資料を用いる必要がある。

例えば、水田稲作の開始はこれまで紀元前 5～4 世紀ごろと考えられてきたが、それは考古学的方法や大陸の資料などを使って推定した年代であった。それが今世紀に入り、土器に付着したススやおこげに含まれる炭素を自然科学的な方法を用いて分析し年代を測定した結果、弥生時代の開始はこれまで考えていたよりも 500 年も前の紀元前 10 世紀にさかのぼるのではないかと、さらに前期の始まりは紀元前 800 年ごろ、中期の始まりは紀元前 350 年ごろではないかと、従来よりも古い年代が示されることとなった。ただ、科学的な分析

結果が出たからといって、そのまま受け入れられるものではなく多くの議論があり、弥生時代の始まりの明確な年代は決着を見ていない。

これに対し、弥生時代中期後半から後期については、北部九州を中心に、製作・使用年代が明確な中国の鏡や貨幣などがその時期の遺跡から出土しており、年代を考える材料を得ることができる。北部九州の福岡県、佐賀県辺りでは 1m を超える土器の棺（甕棺）を作り、その中に亡骸を納め、さまざまな副葬品などを入れていた。中期後半の甕棺や土器は、紀元前 1 世紀（前漢時代の後半）の鏡や五銖銭という貨幣を伴って出土しており、後期前半の甕棺や土器に前漢末から後漢前半にかけての鏡や、新の時代に作られた貨泉（かせん）という貨幣を伴って出土するため、弥生時代後期前半は紀元後 1 世紀から 2 世紀前半頃と考えられている。

また、古墳時代初め頃の古墳からは、紀年銘を鋳出した鏡が出土しており、三国時代の魏の年号を持つものが見られる。このことから、弥生時代の終わりを告げる巨大な前方後円墳が出現したのは、紀元後 3 世紀中頃から後半とされている。

なお、紀元前 108 年、朝鮮半島を支配していた衛氏朝鮮が前漢の武帝に攻撃されて滅び、前漢はこの地に楽浪、真番、臨屯、玄菟という四つの郡を設置した。中国の鏡や貨幣は、この楽浪郡を経由して日本列島に入ってきたと考えられている。このため日本列島に大陸のさまざまな文物が入るようになったのは、紀元前 108 年より後と捉えることもできる。

今日お話しする弥生時代後半期とは、このような弥生時代中期後半以降のありかたを念頭においている。

3. 弥生時代・弥生文化の特質とあゆみ

弥生時代・弥生文化の特質とあゆみを大きく整理すると、次のようになる。

- ① 水田による稲作文化の受容と普及（食料獲得経済から食料生産経済への転換）
- ② 石器時代から金属器時代（青銅・鉄およびガラス）への移行
- ③ 海外の情報との接触（朝鮮半島とアジア大陸にある異文化世界の認知）

すなわち、稲作や金属の使用が広まった結果、生産力が増加した。そして、水田の経営、金属などの生活必需材の入手などを理由に、集団間の争いも起こるようになった。こうしたことが、首長や王と呼ばれる地域社会の有力者の成長に結び付いていった。

縄文時代には見られなかった戦うという行為が、弥生時代に行われるようになったことは、銅剣が刺さったままの骨盤や、肋骨の間に石鏃が刺さったまま埋葬された例などからうかがい知ることができる。

そして中期になると、北部九州では特定の人のために巨大な墓が造られるようになった。佐賀県の吉野ヶ里遺跡にある墳丘墓は南北 40m、東西 27m、高さ 4.5m と推定され、その中に 14 の甕棺墓が葬られている。

このように稲作が普及し、金属器の時代へ移行して、海外の文化を吸収していく過程で、大きな墓に葬られるような有力者が成長していったというのが弥生時代の大きな流れである。こうした弥生文化のあゆみは、日本海西端の玄界灘沿岸地域から、東アジア地域との交流によって始まったとみることも可能であろう。

4. 弥生時代後半期の日本海沿岸地域

弥生時代後半期の日本海沿岸地域を交流という視点から見ると、東アジア世界との交流がもっぱら九州地域で行われていた段階と、九州以東の山陰、北近畿、北陸など幾つもの地域がさまざまに交流していた段階に分けることができる。

特に、後期後半とよばれる時期になると、それまで主要なルートであった瀬戸内海から畿内への交流路や北部九州の大陸文物への求心力が、それ以前に比べて低下したことが指摘されている。そして、これとは対照的に、日本海沿岸の各地で朝鮮半島や大陸との直接的な通交がおこなわれるようになったことが見てとれる。

こうした指摘がなされるようになったのは、西日本の日本海沿岸地域における考古学的な調査の進展によるところが大きい。

ひとつは、鳥取県青谷上寺地遺跡の調査により、通常では遺存し難い金属製、木製、骨角製等の遺物が出土し、この遺跡の交流拠点としての特異な性格と相まってさまざまな情報が得られたこと。もう一点は、山陰から北近畿、北陸にかけての墳墓の調査が進展し、その副葬品をとおして首長と呼ばれる有力者たちの相互交渉と物資保有のありかたが知られるようになってきたことである。特に、この時期の日本海沿岸地域において鉄器の保有が顕著であったことが注目されている。

その結果、当時の日本海沿岸地域において、日本海沿岸の諸地域間での交流、内陸にあたる瀬戸内海、近畿、東海地域との関係など列島内での地域間の交流と、直接的・間接的に東アジア世界との対外的な交流が重層的におこなわれていた様子が、生業、資源、製品、技術などさまざまな側面を通して読み解かれるようになってきた。

4-1. 鳥取県青谷上寺地遺跡の調査成果

青谷上寺地遺跡は、日本海に面する鳥取市青谷町に所在する弥生時代前期後半～古墳時代初頭の遺跡である。現在の青谷平野は、弥生時代には日本海につながる内湾であり、遺跡はこの内湾に面した「港湾集落」であったと考えられている。

もともと内湾で地下水位が高いため、普通の遺跡では腐って残らないような木製品が大量に出土しており、出土した弥生時代の人骨に脳みそがそのままの形で残っていたことでも話題になった。

港湾集落としての性格をよく表すものとして、5 隻の船が舳先を並べて水面に浮かんでいる様子を描いた板が見つかっている。さらに、実際に船を漕ぐときに使われた櫂(かい)や、船内に入った水をすくい出すためのアカトリなども多数発見され、この遺跡では海を使ったさまざまな活動が行われていたことがうかがわれる。

また、魚や貝をとる技術を示す遺物も出土している。アワビオコシと呼ばれるへら状の道具は九州北部や壱岐・対馬では早くから認められているが、日本海沿岸を通じて青谷上寺地遺跡でも用いられるようになった。同様に、大きな魚を捕るために二つの部品を緊縛して作る結合式釣針も、縄文時代から玄界灘沿岸や長崎県で用いられていたものが弥生時代になって日本海を通じて広まり、青谷上寺地遺跡でも出土している。このように、生活のための道具や技術が、日本海を通じて西から伝わっていたことが明らかになっている。

青谷上寺地遺跡では、マカロニのような細長い形をした管玉と呼ばれる石製の装身具が出土しており、その製作もおこなわれていた。管玉の作り方が石川県小松市の八日市地方

遺跡とよく似ていること、小松市付近で採れた碧玉という素材を運びこんでいることなどから、手工業生産を行うにあたり材料や技術が日本海沿岸を通じて東から西へと伝わっていたことが推定されている。

さらにこの遺跡では、大陸からもたらされたと考えられるさまざまな金属製品が出土している。出土した鉄斧の作り方をみると、朝鮮半島で作られた斧と推定され、しかも九州では出土していないタイプであることから、九州を介さずに朝鮮半島から直接物資を輸入するルートを持っていたことも推測されている。

鉄製の道具のなかで特に興味深いのは、耳かき状鉄器と呼ばれる先端を少し屈曲させて薄く仕上げた道具である。青谷上寺地遺跡で一緒に出土した木製品を見ると、非常に精巧な細工を施してある。このことから、耳かき状鉄器は、木を削って透かしを入れるような細かい加工をするために用いられたのではないかと考えられている。

また、花びらのような特殊な装飾が付いた花卉高杯とよばれる木製の高杯が多く出土している。これは石川県でも複数見つかっているほか、島根県や九州まで広がることがわかっている。しかし、青谷上寺地遺跡で出土した高杯と石川県などで出土した高杯は木の種類が異なるため、完成品が各地に送られたわけではなく、同じようなものを作る技術が日本海沿岸の各地に伝わったと考えられる。

4-2. 日本海沿岸地域における首長墓の調査の進展—地域性と共通性—

山陰から北近畿、特に京都府北部の丹後地域や北陸地方にかけて有力者の墓の調査が進展し、副葬品のありかたを通してその交渉の実態が分かってきた。たとえば、日本海沿岸地域の後期の墳墓では、共通して 1m ほどの長大な鉄製の刀剣類を含む非常に多くの鉄製品を副葬している。このことから、この地域では多くの刀剣が流通し、有力者たちが長い大きな刀を保有していたことが明らかになってきている。

丹後半島では、台状墓と呼ばれる丘陵上を幾つかに区画した墓を造り、1 つの区画に対し何人かを埋葬する墓制が行われていた。ここでは、鉄製の武器やガラス製の小玉を非常に多く副葬するという特徴がある。

同じ日本海沿岸でも、地域によって墓制の特徴は異なり、山陰地方では四隅突出型墳丘墓と呼ばれる墓が造られた。四角い墳丘の隅が飛び出したような形になっていて、外表に石を張って石垣のようにするのが特徴である。この形はもともと広島県の山間部で生まれ、鳥取、島根県で非常に発達を遂げた。

四隅突出型墳丘墓は、台状墓を造っていた丹後半島を飛び越えて、北陸地方に伝わったことも知られている。ただし、北陸では外表の石がなくなっているのが特徴である。北陸で最古と考えられている福井市の小羽山 30 号墓にも石は全くないが、鉄製の剣やガラスの管玉といった副葬品が出土している点は共通している。

四隅突出型墳丘墓の分布の東端は、現在の富山県にあたる。富山市の呉羽丘陵、羽根丘陵、富崎丘陵の東側の麓に 7 基、可能性が指摘されているものが 3 基と、四隅突出型墳丘墓が非常に集中している。北陸地方で最初に発見された四隅突出型墳丘墓として著名な杉谷 4 号墳に隣接する杉谷 A 遺跡では、丘陵の縁辺部に四隅が飛び出していない方形周溝墓とよばれる墓が 20 基ほど連なって見つかっており、ここでも素環刀とよばれる鉄刀とガラス小玉の副葬が行われていた。

また、神通川河口付近の富山市四方に打出遺跡がある。ここでは弥生時代後期から終末期にかけての集落跡が発掘され、非常に多くの鉄製工具などの破片や鉄器の加工に使ったと思われる砥石などが出土している。このように、神通川流域のこの地域では、数多くの鉄を保有し、鉄刀などを介して日本海沿岸の他地域と交流していた様子がうかがわれる。こうしたことが、四隅突出型墳丘墓がこの地域に造られた背景にあったとみることができるのではないかと考えている。

5. まとめ

弥生時代後半期（中期後半～終末期）の日本海沿岸地域のありかたを、西日本を中心に交流という視点で概観した。

そこでは、列島内の地域間交流と東アジア世界との対外交流、日常生活や生業活動における交流と首長層にみられる必需材（鉄など）や貴重品の入手・保有といったかたちの交流など重層的な関係のありかたを知ることができる。

また、地域間で共通した特徴がみられる一方で、地域それぞれの個性があること、そして多様な交流ルートのありかた（九州を介さない朝鮮半島との交流、四隅突出型墳丘墓の分布など）が存在したことも理解される。

このように弥生時代の後半期に広範囲に発展をとげた日本海沿岸の交流ルートは、前方後円墳の出現する頃には、瀬戸内海から畿内へのルートに主導権を明け渡すと言われている。この過程の解明が今後の課題である。